

〈世界労連からのメッセージ〉

二〇二〇国際婦人デー三・七東京集会への世界労連の連帯声明

一三二か国の一億人を超える労働者の戦闘的代弁者たる世界労働組合連盟（世界労連）は、活動家集団思想運動と本郷文化フォーラムワーカーズスクール（HOWS）が組織する二〇二〇国際婦人デー三・七東京集会への国際主義の連帯を表明する。

国際的な階級的労働組合運動は、常に、働く婦人に連帯し、資本主義の野蛮と安倍晋三政権の反労働者政策に苦しめられている日本の労働者階級に連帯している。

二〇二〇年は、一九四五年に創立された世界労働組合連盟の闘いと活動が七五周年になる年である。七五年間、われわれは、常に、婦人の真の平等を求め、性差と階級による二重の抑圧から婦人を解放する体制をめざし、人間による人間の搾取のない体制をめざして闘い続けている。

国際婦人デーは、闘いの象徴であり、一九一一年に社会主義者クララ・ツェトキンの提案が承認されて始まった。この日は、一八五七年のニューヨークの婦人被服労働者によるストライキを記念する日であり、彼女らは、同僚の男性労働者と同じ賃金を要求し、労働時間の短縮と人間らしい労働条件を求めて、雇用主たちと政府に敢然と立ち向かったのだった。

しかし、一六三年後のこんにち、当時と同じことが、いまだに要求として掲げられている。労働強化が激化し、フレキシブルな労働形態があたりまえのこととされ、多くの国では、依然として婦人は男性労働者と同じ仕事をしていても少ない賃金しか受け取っていない。しかも、それだけではない。こんにち、二〇二〇年において、科学技術が発展したにもかかわらず、いまだに婦人は、出産時に亡くなり、医療の不足から命を落としている。婦人であるがゆえに学校に通うことができず、人身売買の犠牲となり、売春を強要され、爆撃から逃げようとして、わが子を抱いたまま海でおぼれている。

われわれ世界労働組合連盟は、利潤を増やし続けようとする巨大多国籍企業に奉仕する政策をすべて拒絶する。それは、あらゆる戦争の陰の要因であり、保護剥奪法制や賃金・手当の削減、社会福祉の後退の背後にある本当の要因である。そして、結局のところ、それこそが、さまざまな形態であられる婦人の不平等の真の要因なのである。

われわれは、確信している。国際婦人デーを記念する最良の方法は、そうした政策とその遂行者たちに反対して、闘い続けることである。世界中のすみずみで、すべての婦人が完全に解放されるまで。

二〇二〇年三月四日、アテネ

世界労働組合連盟書記局
【訳＝杉本芳夫】

（『思想運動』1051号 2020年4月1日号）